

命を守る行動を

岡山市・桑田中3年 小川 玲音

「避難指示」行動2%弱



大雨の影響で山から土砂や濁水が流れ出した美作市の国道429号=7日(同市提供)

一本化後初発令、効果薄く

岡山県内では7日から8日にかけて順次、土砂災害の危険性が高まったとして西粟倉村が全域に、美作、津山、笠岡市、鏡野、奈義町が一部地域にそれぞれ避難指示を発令し、対象者は計約7200人になった。しかし、各市町村によると、全て解除された9日までに指定避難所を訪れたのは計約1

20人だった。私はすぐに3年前の7月に起きた西日本豪雨を思い出した。祖父母が住む町も大きな被害を受けた。水道は止まり、スーパードライもなくなった。何度も連れて行ってもらった母の母校も、2学期の授業はできなかった

20人だった。全域の対象者約1400人のうち44人が避難した西粟倉村の担当者は「3年前の西日本豪雨より雨量が少なく、危険を感ぜにくかったのかも」と推測。2地区4320人のうち26人のみ避難した津山市の担当者は、必ずしも対象者全員が危険な状況にあったわけではないとしながらも「自分は安全だと思っていた人の方が多いのでは」と語る。

実際、自宅にとどまっていた西粟倉村の女性(78)は「側溝の水があふれていたが、近くの山も今まで崩れたことがなく大丈夫だと思った」、鏡野町の男性(88)も「これまでの経験から避難しなくてもいいと考えた」と話す。

内閣府は安全が確保されている場合、避難先として自宅の2階や親戚・知人家、ホテル・旅館なども選択肢に挙げており、今回の大雨でも、近くの集会所や、新型コロナウイルス禍の中で「密になりやすい避難所を避けて親戚宅に避難した人もいた」という。兵庫県立大の木村玲欧教授(防災心理学)は「避難所まで移動するのが危険な場合もあるが、いまだにハザードマップを見たことがない人が多いように、災害をわが事として捉えている人は少ない」と指摘する。

2021年7月16日付 山陽新聞

と聞いた。災害後の生活は大変だったと思うが、祖父母が無事であることに何よりほっとしたのを覚えている。

みんなはあの日のことを忘れてしまったのだろうか。まるで映画か何かのような恐ろしい光景だった。確かに、今年は新型コロナウイルスの問題もあり、避難所へ行くことを迷った人もいただろう。実際に、密になりやすいからと、親戚宅に避難した人もいたとのこととで少し安心した。私は多くの人に避難してほしい。自分のため、自分を大切に思ってくれる人のための避難だからだ。そして、「避難しなくても大丈夫だったね」と、笑いながら家に帰ってほしい。

今年5月には、避難するタイミングを分かりやすくするため、「避難勧告」を廃止し「避難指示」に一本化した。しかし、言葉を変えたからといって、避難行動には結びつかなかったようだ。私も避難情報について調べてみたが、どのような土地なのか、どのような建物なのかによっても判断基準が違って難しい。避難しなかった理由を、「今まで崩れたことがない」「これまでの経験から」とあったが、経験のないような災害が起こる今、それを人事と考えるのは助かる命も助からないだろう。

記事には、行政の粘り強い啓発と地域での共助の力を高めることが重要だとあった。人間関係が希薄な現代において、一番大切なのは人間同士のつながりということか。相手の顔も見ず声も聞かず、何でもできてしまう世の中だ。便利なことはそのままに、大切なことは決して失わないようにしたい。人の命は人が守るしかないと思う。